

全国統計マンの祭典

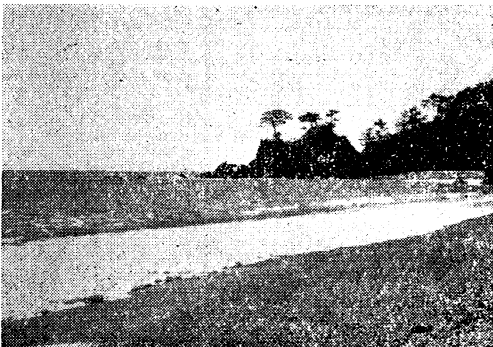
全国統計大会高知県民ホールで開かる

南国土佐というところ

高知県と申しましても、それがどのへんにある県かピンと来ない人もあろう、しかし土佐といえば人々は「あのペギー葉山の唄に出てくる四国の高知県か」ということが思い浮ぶと思う。そういう意味で南国土佐という言葉は、今や高知県の一つのトレードマークとなつている。

高知県は四国の南半を占め、北に四国山脈を背負い、南に陥没湾の土佐湾を抱き、扇をひろげた形をしている。面積は7,104平方キロメートルで四国第1位、総面積の80%を山林が占めており、耕地はわずか8.5%にすぎない。人口は昭和35年の国勢調査の結果によれば、854,595人で、本県の2分の1以下である。産業構造をみると、第1次産業就業者が51%、第2次産業16.4%、第3次産業32.5%で、本県の第1次産業就業者56.4%にくらべ、産業構造は高度化しているといえよう。ために1人当り県民所得においても本県の96,100円に対し96,400円（昭和35年）とわずかではあるが高くなつている。

唄で知られているように、高知県は非常に観光に恵まれており、この地を訪れた人々の目に暖かい南国の情緒を味わせてくれる。月の名所桂浜をはじめ、頂上から瀬戸内海を一望できる五台山、延長4,000mの鐘乳石の大洞穴で、林立する巨大な石筍、石柱に目を奪われる竜河洞、五台山の僧純信と、いかけ屋の娘お馬のロマンスの花が咲いたはりまや橋、台風期には必ずといってよい程登場してくる室戸岬、足摺岬、室戸岬には直径4mの観測範囲半径400km東洋一の巨大なレーダーアンテナと、250万燭光、光達距離30.5哩の灯台がある。



桂 浜

土佐の人間はよく、イゴツソーといわれるそうでそれは頑固であり、一種の意志型の性格である。そのくせ案外人間が淡白で底意がない。これは土佐人が、土佐酒を飲み闘犬を楽しむという躍動的な面を好む反面、尾の長さ6、7mにも及ぶという長尾鳥の静的な美しさを観賞するという性格をいつたものであろう。

土佐の地勢あるいは気候、そしてそこに住む人間の気質、そういう面から考えると当然といえるかも知れないが、高知県からは、全国に自由民権運動を及ぼした、板垣退助、土佐勤王党の盟友で、大政奉還に大きな力を尽した、坂本竜馬と中岡慎太郎、22才で奉行職（国老）を命ぜられ藩政の主班として働き、また南学の修養を加えた、野中兼山などをはじめ、大正から昭和にかけては、宰相浜口雄幸、植物学者牧野富太郎、寺田寅彦など偉人傑士を出している。

現在各地方において地域開発の問題に取り組んでいるが従来高知県も、峻嶮な四国山脈にわざわざいされて、交通の発達がおくれ、そのため産業経済など各種の面で立ちおくれを余儀なくされていたようであります。しかし溝淵高知県知事のもと、着々と開発が進められており、今後の発展が大いに期待され、遠く水戸の地から高知県の躍進を願つて紹介にかえます。

大 会 記

高知駅前降り立つと、大会事務局職員が携帯マイクで「全国統計大会参加の方は事務局の受付へお寄り下さい」と忙しそうにアナウンスしている。みると駅の左側にはテント張の受付所があつた。

市内には歓迎のアーチやビラがはつてあり、大会ムードがかもしだされている。大会の事実上の幕は、19日の6時30分から高知市中央公民館で行なわれた。前夜祭によつて開かれた。会場には丹前姿の観客が詰めかけ、早くも大会気分が盛りあがっている。NHK瀬田アナウンサーの司会で、つぎつぎとお国自慢が披露され時の過ぎるのも忘れ、舞台にひきつけられた。

第13回全国統計大会は、11月20日高知県民ホールで行なわれた。

天候はあいにくの曇空であつたが、11月も下旬という

のに、さすがに南国の朝は暖かい。昨夜から待つていた遠来の大会参加者は、朝の澄んだ、空気を吸いながら、市内のあちらこちらから、大会場目指して集まってくる、心なしかその足音も軽やかに聞こえる。



県民ホール

大会場の県民ホールは、5,600名を収容出来るというマンモスホールで、入口は受付をする人、あるいは記念撮影をしている人などでごった返している。

開会時刻の10時には、2,700名の参加者が集まり、開会を待つばかりとなった、そして定刻10時には、満堂を埋めつくした全国統計マンの嵐のような拍子のうちに、司会者から「大変お待たせしました只今から第13回全国統計大会を開催いたします」という言葉で大会の幕は切つて落された。

はじめに溝淵高知県知事、氏原高知市長から「みなさま南国土佐まで、御遠路ようこそおいでくださいました……。」という歓迎のことばがあり、ついで主催者あいさつを、病気のため欠席された財団法人全国統計協会会長大内兵衛氏に代り、副会長の後藤行政管理庁統計基準局長が、「本日、南国の香り高き高知市県民ホールにおいて多数の参加者を得て全国統計大会を開催できますことは、主催者として大きな喜びであります。わが国の統計が近年急速な進歩を遂げ、しかも利用の範囲がますます増大していることは、皆さん良くご承知のところでありましょう。このようなときにこそ統計の仕事にたずさわられるわれわれ統計関係者は、より良い統計、より真実の統計を利用者に提供するよう努力しなければなりません。われわれ統計関係者は、今後ますます重くなる責任を双肩にない、日本の進歩のために一層の努力を約し相共に前進してゆきたいと思います。」というメツセージを朗読、ついで大内賞、各省表彰、全国統計協会連合会会長賞、第12回懸賞論文入選者、第10回統計図表全国コンクール入選者に対する表彰が行なわれた。引続いて来賓祝辞、祝電披露があり、ついで受賞者代表の謝辞があつた。

時計の針もすでに12時に近くなつた、ここで議事に入り、名古屋市統計課長綿田義光氏から「統計行政の確立

について」鳥取県総務部統計課長荒賀幸吉氏から「統計調査員手当の増額について」の二つの議題が提案され、提案者の説明があつたのち、参加者のうちから委員を選出し、この問題は委員会に付託され、会議は休憩となり昼食をとつた。

午後は、研究発表からはじめられ、静岡県企画調整部統計課望月淳氏から、私たちのくらし「静岡県民生活白書」と題して、発刊の動機、白書という名称で発表した理由、白書作成に当つた組織と機構、白書の理論体型とその手法、白書についての問題点、などについて30分にわたり発表があり、ついで、徳島市富田小学校4年生妹尾昌昭君、堀内知子さんの共同研究になる「郷土徳島港のすがた」を、小学生ながら大勢の聴衆を前に、堂々とした態度で発表した。

ついで、「統計の今後のあり方」と題して、小田原登志郎総理府統計局長、増山元三郎、運輸省気象研究所応用気象研究部第三研究室長、溝淵増己高知県知事、美濃部亮吉東京教育大学教授、の諸講師と後藤正夫行政管理庁統計基準局長の司会によつてパネル討議が行なわれた。

ここで休憩となつていた会議が、再び開かれ、午前中に委員会に付託された事案について、委員長から審議の経過と結果が報告され、全体会議において委員長報告通り採択、決議事項を関係各省庁に申入れすることに決定した。

引続き、第12回全国統計大会の審議事項結果報告があり、また、次期開催地は長崎県と決定した。

盛り沢山の大会行事も次々と行なわれ、いよいよ大詰全国統計マンの決意を内外に示す、宣言を次のとおり行なつた。

わが国の統計が近年急速の進歩飛達を遂げ、しかもその利用の範囲がますます増大していることは、われわれ統計関係者一同のたいなる誇りであり喜びでもある。そして今や世はあげて原子力時代より宇宙開発の時代へと急テンポの躍進を遂げつつあるが、その陰には、近代的統計手法、統計技術の力があづかつて大なるものがあることを、われわれはよく知つている。このようなきびしい時代に直面するとき統計の仕事にたずさわられるわれわれは、時代の要請に即していよいよ統計の整備とその充実につとめるとともに、統計の国際的協力をも力強くおし進めて、世界の平和と人類の繁栄に寄与することを深く期さねばならない。

本日、南国の香り高きこの土佐の地において、第13回全国統計大会を盛大に挙行するにあたり、われわれは決意を新たにして、統計家としての重責を全うすることを固く誓い、ここに次の通り決議しこれを宣言する。

1. われらは新時代における統計の意義と統計家の使命を自覚し、一致協力、幾多の困難を乗り越えて統計の

質的量的発展につとめる。

1. われらは統計の国際的重要度の増大にかんがみ、いよいよ統計の充実をはかるとともに、統計技術の研さんに励んで国際協力の達成につとめる。
1. われらは日夜の別なく統計を駆使する時代の到来を信じ、広く統計教育の実施と統計思想の普及につとめる。



講演

宣言のあと「日本農業の明暗」と題して、東畑精一東京大学名誉教授が、世界における宇宙開発と工業の発展これに関連した農業問題、日本における経済の高度成長と、農業就業者の減少、日本農業の機械化、日本農業の今後の進路などについて2時間にわたり記念講演があり参加者は熱心にメモをとって聞きいつた。

いよいよ大会のフィナーレ、全員が起立し高知市長の発声で万才三唱、広い会場に万才、万才という声が響きわたり、大会の幕は閉じられた。

大会終了後、四国各県の郷土芸能が披露され、高知県の太刀踊り、ヨサコイ節、徳島県の阿波踊り、愛媛県の伊予万才、香川県の吉津二頭獅子と次々と各県の代表的な郷土芸能がくりひろげられ、統計マンもしばらくは統計を忘れその芸術の香り高い、南国情緒豊かな郷土芸能に見いつていた。

もうすでに戸外は真暗になつている、高知県庁バンドの演奏する蛍の光のメロデーとともに、参加者は夜の高知市街へ消えて行つた。(生井)

本 県 関 係 表 彰

団 体

経済企画庁長官表彰

北 茨 城 市

個 人

経済企画庁長官表彰

県 統 計 課

佐 藤 正 敏

全統連会長表彰

大 子 町 役 場

益 子 利

統計図表全国コンクール

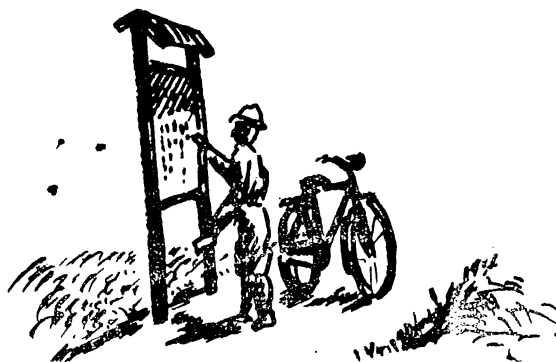
結 城 市 立

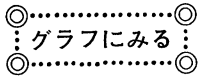
菊 山 重 代 子

入 選 者 全統連会長賞

上 山 川 中 学 校

吉 森 す み 子





伸びゆく本県の工業

一国の経済発展をみる場合、その国の工業化がどの程度進んでいるかをみればわかるというように、県においてもその意味で工業の動向は極めて注目されるものであります。

現在県が推進しております総合開発事業の大きな目的は、所得水準の低い農業県から脱却し、先進的な工業県に生れかわろうとしているものであります。

そこで近年における、本県工業の歩みを通産商の実施している工業統計調査の結果から眺めてみると、従業者数は31年の61千人から36年には123千人となり6年間に約2倍になっている。一方製造品出荷額も31年の740億円に対し、36年には2,570億円と著しい増加を示しております。33年は前年にくらべ、従業者数、製造品出荷額ともに

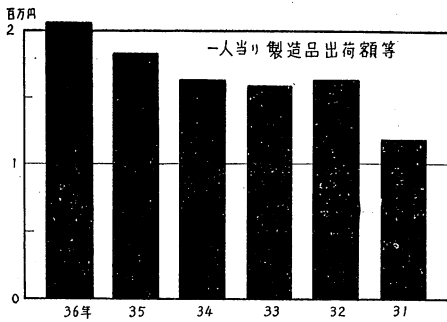
ともに減少を示しておりますが、これは国の経済において32年の設備投資の行き過ぎ抑制の手段として、金融引締が行なわれたため、33年はいわゆるナベ底景気といわれた年だからです。

1人当りの製造品出荷額は31年の1,200千円から年々増加しており、とくに34年から35年・36年にかけての増加は目立っている。これは過去における設備投資の効果が現われ、オートメ化された工場からどんどん製品が生産され、生産性が向上したものと考えられる。

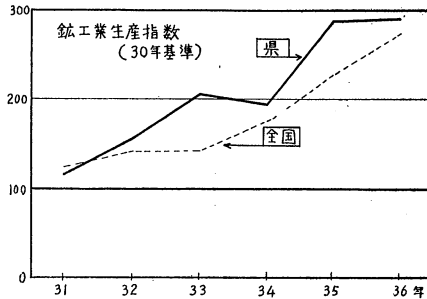
いずれにしても、このグラフでみるかぎり、本県の工業は急速とはいえないが、順調に伸びていることは明らかであり、これが今後総合開発の実施によつて大きく

伸張することが期待されます。(生井)

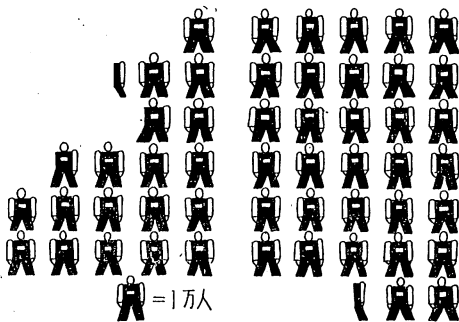
伸びゆく本県の工業



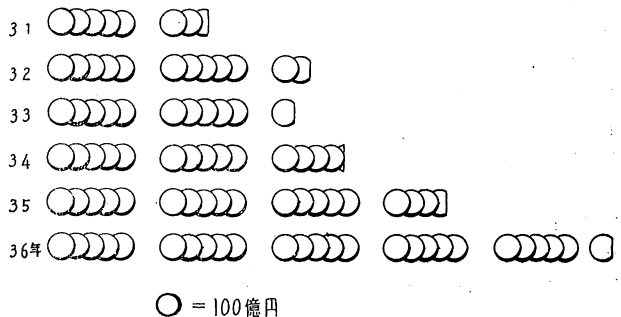
資料 工業統計調査 (千人以上の事業所)



従業者数



製造品出荷額等



★統計資料案内★

<不 定 期 刊 行 物>

資 料 名	調査年 刊行年	発 行 者	資 料 名	調査年 刊行年	発 行 者
土地人口			学校基本調査結果速報	37年	千葉県統計課
都道府県人口の推計(改訂)	26~	総 理 府 統 計 局	工業統計調査結果表	36年	三重県
国勢調査結果報告(愛媛県)	29年	〃	県民の家計	37年	香川県統計課
〃 (香川県)	〃	〃	岩手県勢要覧	36年	岩手県
従業通学地に関する結果速報	〃	〃	岡山県鉱工業生産指数	〃	岡山県
(茨城県)	〃	〃	愛知県民所得統計表	25~	愛知県
(栃木県)	〃	〃	長崎県勢要覧	35年	長崎県総務部統計課
(富山県)	〃	〃	愛媛県鉱工業生産指数	1962年	愛媛県総務部統計課
(和歌山県)	〃	〃	教育調査統計要覧	35年	和歌山県教育庁行政課
(青森県)	〃	〃	静岡県 of 県民所得	36年	静岡県企画調査部統計課
商 工			大阪府農業調査結果報告	35年	大阪府総務部統計課
機械工業設備調査報告	36年	通産省重工業局	宮城の経済概況	1962年	宮城県調査課
鉄道車両等生産動態統計年報	36年	運 輸 省	昭和36年輸出生産実態調査結果報告	36年	神奈川県
改訂昭和35年基準指数の概要	37年	通産大臣官房調査統計部	栃木県のすがた	1962年	栃木県総務部統計課
農 林			県勢要覧	1962年	佐賀県
漁業動態調査速報	36年	農林省統計調査部	統計からみた山梨のすがた	37年	山梨県総務部統計課
農業調査結果報告(総括編)	〃	〃	和歌山県統計年鑑	34年	和歌山県
経 済			米の生産額	37年	茨城県統計調査事務所
家計調査年報	36年	総 理 府 統 計 局	三重県鉱工業生産動態統計調査結果年報	36年	三重県
民間給与実態調査結果表	37年	国 税 庁	昭和37年産水稻うるち品種別作付面積農家数一覧	37年	農林省茨城統計調査事務所
運輸通信			奈良県統計年鑑	35年	奈良県
郵政統計年報	36年	郵 政 省	愛知県勢要覧	1962年	愛知県
鉄道統計年報	36年	日本国有鉄道関東支店	新規立地工場建設並びに生産状況調査結果	37年	茨城県総合開発事務局
教 育			神奈川県の人口と世帯	37年	神奈川県企画渉外部統計調査課
教育統計	79号	文部省調査局統計	長野県鉱工業生産指数	35年	長野県総務部統計課
学校設備調査報告書	36年	文 部 省	人口と世帯数	37年	栃木県
学校保健統計報告	36年	〃	鳥取県勢要覧	37年	鳥取県
鹿児島県工業の概況	36年	鹿児島県総務部統計課	モデル賃金調査結果	37年	東京商工会議所
群馬県個人商工業経済調査結果概要	36年	群馬県総務部統計課	経済情報	1962年	東京都経済局
奈良県農業基本調査結果概要	36年	奈良県総務部調査課	水産業構造改善基本調査結果	37年	茨城県農林水産部漁政課
学校統計要覧	37年	神 奈 川 県	茨城県農林水産統計年報	1961年	農林省茨城統計調査事務所茨城農林統計協会
香川県のすがた	37年	香 川 県	農業構造改善事業のしくみ	37年	茨城県企画課
農業基本調査結果	37年	千 葉 県 統 計 課	国民健康保険事業状況	36年	〃
島根県民所得	35年	島 根 県	人口確定数	35年	茨 城 県
香川県統計年鑑	37年	香 川 県	市町村長期計画参考資料	37年	茨 城 県 地 方 課
県勢振興長期計画	37年	栃 木 県	初任給調査結果報告	37年	茨城県経営者協会
兵庫県民所得	35年	兵庫県文書統計課			
農業基本調査結果概要	36年	長野県統計課			

<定 期 刊 行 物>

資 料 名	月号	発 行 者	資 料 名	月号	発 行 者
日本統計月報	10, 11	総 理 府 統 計 局	統 計 千 葉	10	千葉県統計協会
消費者物価指数	9	〃	統 計 東 京	9~10	東京都総務部統計課
労働力調査報告	9	〃	東京小売物価動向	10	東京商工会議所
指定統計調整報告届出統計月報	10	行政管理庁統計基準局	東京卸売物価動向	10	東京商工会議所
統計情報	11	〃	東京都標準世帯家計調査報告	9	東 京 都
通産統計月報	11	通商産業大臣官房調査統計部	神奈川の統計	11	神奈川県統計協会
百貨店販売統計月報	9	〃	神奈川県人口と世帯	8~9	神奈川県企画渉外部統計調査課
出荷在庫統計速報	11	〃	静岡県の統計	11	静岡県統計課
生産統計速報	11	〃	統計マ ン	7	富山県統計課
繊維統計速報	10~11	〃	統計の目	7	福井県統計協会
紙パルプ統計速報	10	〃	統 計 苑	10~11	岐阜県統計課
日用品皮革統計月報	8~9	〃	統計月報	11	愛知県総務部統計課
ゴム統計月報	9	〃	京都市統計情報	9	京都市行政局統計課
労働経済指標	10	労働大臣官房労働統計調査部	会 議 所 月 報	11~12	大阪商工会議所
窯業建材統計月報	8~9	通商産業大臣官房調査統計部	大 阪 の 統 計	9	大阪府統計課
機械統計月報	9	〃	兵 庫 の 統 計	10	兵庫県統計協会
小売物価統計調査報告	9	総 理 府 統 計 局	統 計 月 報	10	鳥 取 県
繊維統計月報	9	通商産業大臣官房調査統計部	島 根 の 統 計	11	島根県統計協会
人口推計月報	8	総 理 府 統 計 局	統 計 の 泉	10~11	広島県統計協会
機械器具流通統計調査結果表	6~7	通商産業大臣官房調査統計部機械統計調査室	香 川 統 計 だ よ り	7	香 川 県 統 計 課
郵政統計月報	8	郵 政 省	えひめの統計	11	愛媛県統計協会
運輸統計季報	9	運 輸 省	高 知 県 経 済 指 標	4	高知県総務部統計課
家計調査報告	6	総 理 府 統 計 局	統 計 福 岡	11	福岡県統計課
建築動態統計月報	3~5	建 設 省 計 画 局	統 計 佐 賀	10	佐賀県統計課
毎月勤労統計調査結果報告	8	労働大臣官房労働統計調査部	統 計 月 報	9	長崎県総務部統計課
都道府県展望	11	全 国 知 事 会	熊 本 の 統 計	8~11	熊本県統計協会
広 報 研 究	12	全 国 広 報 研 究 会	統 計 宮 崎	5~8	宮崎県統計課
経済統計月報	10	日本銀行統計局	統 計 鹿 児 島	11	鹿児島県統計協会
コンクリートブロック	8~10	日本コンクリートブロック協会	県内一般預金増減額速報	10	日本銀行水戸事務所
国土情報	5~8	財団法人国土計画協会	茨 城 春 秋	10	茨城春秋社
自動車販売実績調査	3~7	自動車工業会	農 業 茨 城	12	茨城県農業技術研究会
統計	10~11	日本統計協会	下 館 市 報	9~10	下館市役所
政府刊行物	6	政府刊行物普及協議会	生乳、乳製品の生産消費量に関する統計	6~7	農林省茨城統計調査事務所
統計あおもり	11	編 青 森 県 統 計 課	専 売 統 計 月 報	9	日本専売公社水戸地方局
みやぎ統計	11	宮城県統計協会	茨 城 県 気 象 月 報	8~9	水戸地方气象台
統計春秋	6~8	福島県統計協会			
統計月報	10	埼玉県総務部統計課			

経済の高度成長と農業問題 (2)

前号でお話ししましたようなことから、本県の所得水準の低位性というものは、労働生産性の低い第1次産業就業者が全国の割合に対して非常に大きく、反面労働生産性の高い非農林漁業就業者の割合が少ないということいいかえれば、本県の農業県としての特性を明確にしております。

ここで考えられることは、戦後の農業は技術の進歩、農法の発達とによつて、戦前とは比較にならないほどの発展を示しました。農業労働生産性は労働時間あたりでみて、昭和30年ごろまでは第2次産業に劣らない向上をとげております。

この結果、農家の消費水準は都市生活者よりも早く戦前水準を突破したわけですが、さらに鉱工業の進歩につ

れて、農業人口は第2次産業、第3次産業部門にも多く流入し、農家経済はかなり好調裡に推移したのです。しかし、最近では、農業労働生産性の向上はようやく低迷期にはいり、農業人口が引きつづいて第2次、第3次産業に移りつつあるとはいえ、農業技術の進歩に一応のヤマがみえはじめたため、生産性の上昇テンポは緩慢化しております。これからの農業生産性を高めるために、そして、第1次産業の所得向上のためにどのような施策が必要なのか、大きな世論として論議されるのも当然でしょう。

ところでこうした現象を本県の統計はどのように説明しているでしょうか。

産業別労働生産性

	就業人口構成と所得構成 (%)				
	就業人口構成		所得構成		所得の全国に占める割合
	34年	35年	34年	35年	34年
全 国	%	%	%	%	%
第1次産業	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
第2次産業	58.6	56.4	33.2	31.5	3.7
第3次産業	15.6	17.3	24.9	27.6	1.4
第3次産業	25.8	26.3	41.9	40.9	1.6

この表をみますと、昭和35年では第1次産業就業人口構成は総就業人口の56.4%の人口を擁しながら、所得構成では31.5%の所得しか確保できず、依然として低い生産性のもとにあります。

これに対し第2次産業になりますと17.3%の労働力をもつて、27.6%の所得を生み出し、第3次産業にあつては、26.3%の労働力投下によつて40.9%の所得を得ている結果になります。

このように第1次産業就業人口の占める割合が大きいため、本県の平均所得をいちじるしく左右していることは否定できない事実でありましょう。

昭和36年農業基本調査結果報告によりますと、県内総農家世帯数は209,118世帯でこれは本県総世帯数の51.1%にあたります。この農家世帯について経営規模別によりますと次表のとおりです。

経営耕地面積広狭別農業事業体数

経営規模別 年次	総 数	5a~10a	10a~30a	30a~50a	50a~1ha	1ha~ 1.5ha	1.5ha~ 2ha	2ha~ 3ha	3ha以上
		戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸
昭和30年	213,517	4,390	26,564	26,649	62,928	52,920	28,080	11,309	677
昭和34年	210,832	3,868	25,211	25,818	60,989	53,878	28,892	11,482	694
昭和36年	209,118	3,331	24,698	25,044	59,271	53,474	29,971	12,534	795
増 減	△ 4,399	△ 1,059	△ 1,866	△ 1,605	△ 3,657	554	1,891	1,225	118

(注) 増減は昭和30年との比較 △印は減少を示す

この表をみてわかりますように0.5ha～1.0haの階層が112,344戸つまり全体の53.7%を占めております。これを昭和30年の120,531戸にくらべると8,187戸の減少

つまり離農という現象が生じております。

これに反し、1ha以上の農家数は次のような増加を示しております。

1ha以上農家の推移

年次	経営規模				
	総数	1ha～1.5ha	1.5ha～2ha	2ha～3ha	3ha以上
昭和30年	92,986	52,920	28,080	11,309	677
昭和36年	96,774	53,474	29,971	12,534	795
増減	3,788	554	1,891	1,225	118

また、これを専業・兼業別に考察してみますと、農業を専業とする農家は107,614戸で51.8%、兼業農家は101,504戸で48.5%を示しており、これを昭和27年に比較してみますと、専業農家は34,428戸の減少、兼業農家は30,961戸の増となります。

さらに昭和30年以来豊作が5年も続き農家の収入は毎年ふえておりますが、技術革新の波に乗った経済の成長はそれをはるかに上回っております。つまり、昭和35年県内農業生産所得は570億円で、前年の520億円にくらべ8.3%の増加であるのに対し、県内第2次産業の生産高は570億円で前年の440億円にくらべ27.8%と大きな伸長を示しております。

結局こういつた結果農業所得と他産業との所得の開きは年々大きくなり、そのため農家の他産業への進出という現象が活発となり、特に上述の統計にみられますように1ha未満の農家にそうした現象がはげしいということです。

しかしながら、終戦直後の農業経済は非常に良好であったことは、今までお話したとおり他産業に比べ戦災による被害が軽微であったこと、飢饉の食糧事情から農産物のヤミ価格が他商品にくらべ相対的に高かったことなどがあげられます。

終戦時の県民所得がありませんので、ここに国民所得を参考までに引例しますと、他産業の実績国民所得がいずれも戦前の半分以下に減っているのに、農林水産業だけは戦前の28億5,400万円が、昭和21年度には32億2,000万円（いずれも実質国民所得）に増加しております。このことを見ましても終戦後の農林ブームの一端を現わしていることがわかります。

終戦時の産業別国民所得

(単位100万円指数9～11年=100)

		戦前 (昭和9～11年平均)	昭和21年度
農林水産業	名目所得	2,854	140,101
	実質所得	2,854	3,220
	同上指数	100.0	112.8
製造業鉱業	名目所得	4,426	95,074
	実質所得	4,426	2,185
	同上指数	100.0	49.3
その他の産業	名目所得	7,098	125,680
	実質所得	7,098	2,896
	同上指数	100.0	40.8

しかし、最近俗に「三チャン農業」と呼称されますように「ヂイチャン」、「バアホヤン」、「カアチャン」によって構成される専業農家の多いことです。

つまり従来のとおり息子が離村、あるいは離農して都市に就職し、オヤジ夫婦で農業を行なっているような場合です。

このようなケースには、やがて第二種兼業農家へ、さらに脱農の途をたどるものも少なくないでしょう。

したがって、各市町村においても、このような農村自体の実態といものを考慮に入れて、農業構造改善事業計画を推進していかなければ農業の発展もなかなか困難でしょう。その前途は茨の道であり、多くの課題が山積しているわけであります。

(県統計課済経統計係長 横須賀 弘)

市 町 村 の 横 顔

水 戸 市



山 本 市 長

概況

水戸は、水戸黄門漫遊記によつて親しまれている徳川光圀(義公)の城下として発達した町で史の都、梅の都ともいわれる。市街地が馬の背のような丘陵地帯にあるので、今のところ他の観光地のような

華やかさはないが心が味わう風趣の都であり、多くの史蹟を巡つて往時を偲べば、そこには新しい感激が胸をうつことであろう。

水戸の地名は、大むかし水路の中心で船の出入が輻輳した港であつたために「ミナト」が転訛して「ミト」となつたとも伝えられている。

今から約 770 余年前の鎌倉時代初期、馬場小次郎資幹が、館城を築いたのが水戸市街地のおこりで、そののち江戸氏、佐竹氏の城主時代を経て、慶長14年藩祖徳川頼房が御三家の一つとして封ぜられるに及んで、城市の大改修を行ない、西方にもその範囲を拡大する一方、城の東部にあつた湿地を埋めて市街地をつくり、面目を一新して、常陸国中第一の邑都となつた。その後第二代光圀以来歴代藩主相ついで城下町の発展につとめ、今日に見るような水戸市の基礎を築いた。

明治維新後、藩はそのまま存続したが、明治4年の廃藩置県で水戸県が置かれまもなく茨城県に改められたが当時の水戸は茨城郡の(のち東茨城郡)に属し、明治22年4月1日市制、町村制の施行により、茨城県最初の市となつた。その際旧上市、旧下市のほか接続地の常磐、細谷、吉田、浜田4カ村の一部を併せ、人口25,591人の都市となつたが、政治、経済、文化、各種交通機関の中心地として伸展の一途をたどり、昭和8年常磐村を合併し、一大躍進をみようとしたが、たまたま20年8月2日弘暎の戦災で市の8割を烏有に帰し、人口も一時5万人台を割るに至つた。翌21年天皇陛下には、とくに戦災状況を御視察あそばされ、22年新春の御製に

たのもしくよはあけそめぬ水戸の町

うつつちのおともたかくきこえて

と御発表があつた。しかして市民の復興意欲はいよいよ旺盛を極め、加えて隣接村の合併も進展し、人口も14万

6千人を突破し、名実共に今日のような大水戸市としての発展を見るに至つたのである。

産 業

初めて水戸城の築かれた頃は、極めて小規模なものであつたが江戸氏の入府後は逐次、地方の中心として発展し、佐竹氏さらに徳川氏の入府により城下町としての条件が備わるに至つたが、特種の産業は少なく、今日におけるがごとき純然たる消費都市として生長した。

今日その就業人口を見ると第3次産業就業者が全体の55.6%を占め、次に第1次産業就業者が24.6%と2位を占め、第2次産業就業者が19.8%と最下位にあることでも消費都市の性格が裏付けられるのではあるが、しかしこれを更に細分すると就業者の約半数が農業及び商業従事者であるところからみて本市の産業は農業と商業で、いずれも県下一の事業体をようし中でも商業は近代的都市美の観点から南町、泉町、大工町には燦然と輝く延長約1,300メートルに及ぶ商店街に「シルバーアーケード」が建設され、街路水銀灯など近代照明の粋を集め、随所に灯る広告ネオン灯とともに美しい夜景が、ようやく県都にふさわしく見られるようになった。

しかし本市も首都圏整備法に基づく市街地開発区域として指定され、また近郊東海村を中心とする一帯は、わが国原子力長期開発の拠点として将来ますますその拡大が予想されること等を考え合せたとき、本市の就業構造もまた相当変化するものと思われる。

教育文化

俗に水戸黄門でとおる二代藩主光圀は、学問識見ともにすぐれた名君とうたわれ、大日本史をはじめ多くの文化事業を世に残したが、特に大義名分を明らかにすることに力を注いだ。また光圀は封建の世の支配者には珍らしく庶民的な人物として知られているが、講談水戸黄門漫遊記は、世俗的にこの点を強調したものでらしい。亡くなつた当時の落首に次のようなものがある。

天が下 二つの宝尽きはてぬ

佐渡の金山 水戸の黄門

と死をいたむ民衆の気持がうかがわれておもしろい、光圀と並んで名君といわれる第九代藩主斉昭(烈公)の弘道館設立による子弟教育、水戸学の完成など文教の府として全国より注視的で、明治維新後も、その伝統は水戸の特長の一つであつた。戦災により一時その姿は消えたが、その意欲は消失することなく往年の文教の府を更に現代に顕現しようと努力している。

なお本市の産業、教育文化等その他すべての面に深くつながりをもつこの歴史的な過程を究明して市民の郷土愛を高揚し、併せて将来における市勢発展に寄与するため昭和35年より水戸市史の編さんに着手したことは、まことに時宜を得たものというべく、来年度に上巻が発刊されることをひとしく期待するものである。

(水戸市役所 白井 記)



人間雑話(7)

茨城大学教授 塚本勝義

人間はつまらぬことを喜ぶ。だから、つまらぬことでも心配する。悲喜哀歓、みんなつまらぬことで左右される。事の重大性は、その人の気持で決められる場合が多いようだ。原子爆弾を持ちまわす話には顔色を変えないが、つり銭が一円不足すると、まつさおになるのが人間らしい。

○ ○ ○ ○

若くして亡くなった詩人中原中も奔放な人間だった。彼が十八歳のとき、恋人長谷川泰子に逃げられた。逃げた泰子は彼の親友小林秀雄の許にはいり込んだ。むき出しな言い方をするなら、中原は恋人を小林に奪われたのである。この事件は中原の胸に相当こたえたらしい。その打撃が、いかに深刻であったかは、この事件に触れることを好まなかつたことに依つて知られる。

目まいするほどの打撃を受けると、どんな人でも、その打撃を語りながらぬ。ちよつとさわつただけでも苦しいからだ。語る元気もなくなつてしまう。

よく俺は若い頃、苦労したんだよ——なんて楽しそうにホラを吹く人があるが、愉快に語れる苦労なんだからどうせ大した苦労ではない。それが、骨をくだくほどの苦労であつたなら、思い出だけでもつらいはずだ。

深刻な苦労、深刻な心配、深刻な失望——といったことに出あえば、人間は沈黙する。つまらないから俺は死ぬなんてしゃべる人間に限つて、なかなか死なぬ。本当につまらなさを実感した人だけが突然この世に決別する。

かかる人間性は「よろこび」の場合も同じだ。ほんとうにうれしいと、ただ涙を流すだけだ。「あなたにお逢いすることができて、あたし、とつても嬉しいのよ」なんていう言葉は信用できない。こんなきれいな言葉よりも一滴の涙の方が、ずつと真実がこもっている。

○ ○ ○ ○

あの人は情熱がある——と言つて、手ばなしでその情熱を肯定する。ところが太宰治は人間失格の中で、情熱とは相手の意見を無視する感情だとケチをつけている。「文句言つたつてかまうもんか、やれ、やつてしまえ」と言つた情熱は、たしかに暴力的感情だ。

○ ○ ○ ○

恋愛期の言葉と結婚期にはいつてからの言葉では、受けとり方が違つてくる事情を三浦朱門は「二人の妻」で

具体的に書いている。恋愛期における助言は百パーセントありがたい。うつかりすると涙だつて流れかねない。それこそ純粋愛の結晶だと骨身にしみる。ところが結婚してからの助言はうるさい。言われれば言われるほど癪にさわり、つい「だまつてろ！」なんてどなつてしまう。言葉ばかりではない。やることだつて同じだ。恋愛期の間抜けは朗らかで楽しい。笑いの種であり、思い出の種でさえある。残念ながら、夫婦になつてからの頓馬は腹立たしくてたまらぬ。何の因果でこんな「がらくた」と一緒になつたのか、と情なくなる。言うことやることは全く同じなんだが、感じ方は完全に逆になる。だから人間関連はむずかしい。むずかしいから面白い。理屈屋は悲劇と喜劇を区別して説明するが、それは筋を通すための理屈であつて、現実的には(ひとりの人間においては)ごちやごちやに入りまじつてるとするのが本当だろう。

○ ○ ○ ○

吉川英治のあとを追うようにして正宗白鳥が亡くなった。純文学一本槍で貫いたから大衆の人気はないが、大物だつた。その出発は明治四十年だ。六十年に近い作家生活となる。青年期から老人のようであり、老人になつてからも青年のような持ち味を失わなかつた。白鳥のことを考えだすと、きまつて詩人高村光太郎を思い出す。白鳥は六十年間、ひとつも自己の姿勢を変えていない。光太郎は詩壇の動きを敏感に反映してカメレオンのように変わつている。変わるのも成長の一現象であろうからそれが悪いなどとはいわぬ。しかしながら、めまぐるしく変わられると、いつたい、どこが本当のところなんだと言いたくなる。白鳥のように変わらないと、退屈する人もあろうが、どこか頼もしく感じられる。

どこの職場にだつて白鳥型と光太郎型がいるだろう。「あの人は、この課のヌシだ」なんて言われている人は白鳥型だ。十年一日の如く黙々として動いている。俗にいう栄進組には入らないが、いざというとき信頼される。なくてはならぬ存在だ。光太郎型は、にぎやかで、華かでもある。進歩的にも見えよう。だが、にぎやかな割りには本当の仕事はできないようだ。といつて、白鳥型だけでは職場の空気が淀んでしまう。景気のいいラッパ吹きも必要だ。人さまざまが寄り合つて、さまざま動きをするので、いわゆる活気が盛り上がるのだろう。